



高鼻遺跡発掘調査報告書



0050277532

平成13年度

倉吉市教育委員会



序

この報告書は、平成13年度に個人の農地造成事業に伴って、倉吉市勤字高鼻において実施した埋蔵文化財の発掘調査記録です。

今回の調査は、灘手平野を見下ろす低丘陵先端部に位置した円墳です。果樹園であった調査地は、全体に大きく削平があり旧状をとどめる部分は少なく、古墳の大部分は失われていましたが、昭和57年に調査した高鼻2号墳に続き、4号墳と5号墳を確認し調査することができました。

この報告書が文化財の理解と活用に役立てれば幸いです。最後になりましたが、調査にご協力いただきました土地所有者の田中喜昭氏、ならびに関係各位に対して深く感謝の意を表すものです。

平成14年3月

倉吉市教育委員会
教育長 八田 洋太郎



例　　言

1 本報告書は、平成13年度に倉吉市教育委員会が、個人の農地造成事業に伴う事前調査として、国・県の補助を受けて、鳥取県倉吉市郷字高鼻74-2番地において実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2 調査体制は次のような組織・編成である。

調査主体 倉吉市教育委員会

事務局 倉吉市教育委員会文化課文化財係

八田洋太郎（教育長）	景山 敏（教育次長）
眞田 廣幸（文化課課長）	藤井 晃（文化課課長補佐兼文化財係長）
藤井 敬子（文化財係主任）	森下 哲哉（文化財係主任）
根鉢智津子（文化財係主任）	加藤 誠司（文化財係主任）
岡本 智則（文化財係主任）	岡平 拓也（文化財係主任）
山崎 昌子（文化財係主任）	金田 朋子（臨時職員）

調査補助員 山根 雅美・松田 恵子

内務整理 泉 美智子・世浪由美子・松嶋あつ子・竹戸 晴子・山本 錦・湯浅 博・前板 英樹・明里 千秋

3 現場での調査及び報告書作成は森下が担当した。浄書は世浪が担当した。

4 第1図（地形図）は、国土地理院発行の1:25,000地形図「倉吉」の一部を複製・加筆したものである。第2図（地形図）は、1:2,500国土基本図 倉吉市平面図を使用した。

5 掘図中の方位は、国土座標第V座標系の北を指す。

6 遺物に付した記号・番号は、本文・掘図・図版で統一している。

7 調査によって得られた資料は、倉吉市教育委員会が保管している。

本 文 目 次

I 発掘調査に至る経過	1	第1図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図	2
II 位置と歴史的環境	1	第2図 高鼻遺跡調査区位置図	3
III 調査の概要	5	第3図 高鼻遺跡遺構全体図	4
IV まとめ	6	第4図 4号・5号墳断面図	5
報告書抄録		第5図 4号墳出土鉄製品	6
		第6図 4号墳1号埋葬施設復元図	7
		第7図 4号墳2号埋葬施設復元図	9

挿 図 目 次

図版1 調査後遠景・全景
図版2 4号墳1号埋葬施設
図版3 4号墳2号埋葬施設
図版4 4号・5号墳出土遺物

図 版 目 次

I 発掘調査に至る経過

平成11年10月、倉吉市鈎の田中喜昭氏が、倉吉市鈎字高鼻74-2番地の山林を畠に造成したいので、この土地における埋蔵文化財の有無の確認が倉吉市教育委員会文化課にあった。ただちに田中氏とともに現地を確認したところ、計画地は山林で平坦地であった。田中氏によると、以前は果樹園であり、この果樹園を開墾する際に小さな高まりを削ったとの説明であった。周辺には箱式石棺の材と考えられる扁平な石の集積があり、古墳が存在する可能性が考えられた。このため遺跡を確認する試掘確認調査を平成12年10月に、国・県の補助を受けて実施した。試掘確認調査の結果、丘陵の先端部で幅の狭い古墳の溝を確認し、古墳の存在が明らかとなった。

この結果を受けて、開発される丘陵400mについて事前に発掘調査を実施することになった。発掘調査は、平成13年度の国・県の補助を受けて、倉吉市教育委員会が主体となり、平成13年11月7日～11月30日まで実施した。

なお、今回発掘調査した2基の古墳は、丘陵は異なるものの昭和57年度に発掘調査した前方後円墳の高鼻2号墳と同じ字高鼻地内に所在し、基部で一つの丘陵になるところから、高鼻2号墳の南西に所在する高鼻3号墳に続く4号墳・5号墳と呼称することとした。

註

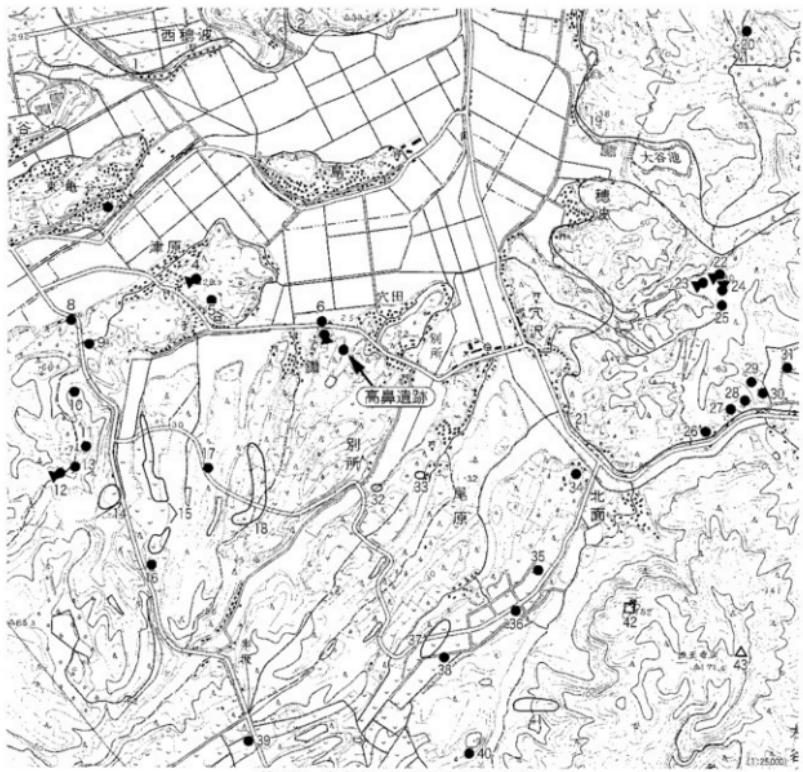
眞田廣幸『高鼻2号墳(舞手2号墳)発掘調査報告』倉吉市教育委員会 1983年

II 位置と歴史的環境

高鼻遺跡は、倉吉市街地から北西に約6km離れた倉吉市鈎字高鼻74-2番地に所在する。そこは、鈎地区の東側にあたり、南から北に延びる立縫丘陵が最前端で灘手平野に落ち込んでいる。丘陵先端部分に位置する高鼻遺跡は、水田との比高差約15mを測る。鈎地区を含むこの付近は、大山（標高1,711m）の火山活動によって形成された洪積世丘陵が、なだらかな勾配をもって、細長い谷に樹枝状に入り組んだ立縫丘陵を構成する。丘陵の北側は、北流して日本海に注ぐ由良川を中心に低湿地が広がる。この低湿地は灘手低湿地ともよばれ、入海であったという。

高鼻遺跡が所在する丘陵には小規模な古墳群が存在する。高鼻遺跡の南側10mあたりには、低丘陵の円墳2基が所在し、さらに西隣の丘陵上には3基の古墳が所在していた。しかし、前述したように昭和57年度に発掘調査した前方後円墳の高鼻2号墳と、道路工事によって削平された高鼻1号墳がすでになく、現在は高鼻2号墳の南30mのところに高鼻3号墳（円墳）が所在する。さらに丘陵の基部から南側にかけて堀切等の痕跡があり、中世城館の存在が認められている。また同じ立縫地区の谷には弥生時代中期から古墳時代にかけての集落跡である高原遺跡が所在し、さらに古墳時代の方墳や土器棺も確認されている。高原遺跡が所在する丘陵には前方後円墳の大塚山古墳も所在する。

高鼻遺跡の所在する倉吉市北西の立縫地区には、旧石器時代から奈良・平安時代および室町時代にいたる多くの遺跡が分布している。しかし、その大部分は弥生時代から古墳時代の集落跡と古墳が占める。旧石器時代では高鼻2号墳丘内と、上神51号墳丘盛土内で細石刃石核が発見されている。繩文時代では北面の取木遺跡で早期の竪穴住居址と焼石群が、同じ北面のイクス遺跡や大谷の中尾遺跡、鈎の大山遺跡で狩猟用の落し穴が確認されている。



第1図 倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

1 西穂波古墳群	10 清水谷古墳群	19 曲古墳群	28 クズマ遺跡1次	37 コザンコウ遺跡
2 瀬戸古墳群	11 駄道東遺跡	20 曲宮ノ前遺跡	29 クズマ遺跡2次	38 道祖神峰遺跡
3 東龜谷古墳	12 二タ子塚6号墳	21 上神古墳群	30 イガミ松遺跡	39 矢内谷峰遺跡
4 大塚山古墳	13 二タ子塚遺跡	22 上神44号墳	31 西山遺跡	40 両長谷遺跡
5 高原遺跡	14 郊家平古墳群	23 上神45号墳	32 鉄山平たたら	41 野田古墳群
6 高鼻1号墳	15 頭根後谷遺跡	24 上神48号墳	33 伯尾山窯跡	42 四王寺跡
7 高鼻2号墳	16 東島ケ尾古墳	25 上神51号墳	34 イキス遺跡	43 大谷城跡
8 西焼ス古墳群	17 大仙峯遺跡	26 伯尾山龜王窯跡	35 取木遺跡	
9 清水谷尻1号墳	18 大山遺跡	27 上神119号墳	36 一反半田遺跡	



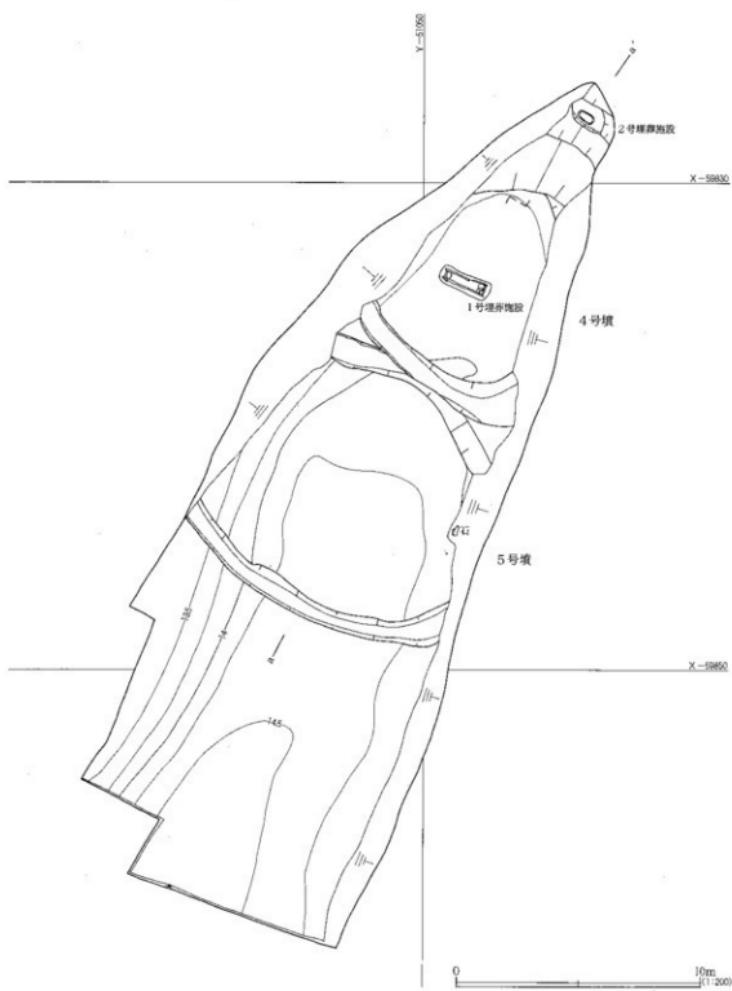
第2図 高鼻遺跡調査区位置図

弥生時代ではイキス遺跡で弥生時代前期の土墳墓群が知られ、寺谷の西前遺跡A地区から弥生時代中期の竪穴住居、鞠ヶ家山の東側にあたる北条町米里で銅鐸が出土する。弥生時代後期になると、久米ヶ原丘陵を中心に非常に多くの集落跡が出現し、遺跡の広がりとともに人口の増加を物語る。集落には上神のクズマ遺跡1次・桜木遺跡・上神宮ノ前遺跡、和田の夏谷遺跡があり古墳時代まで引き続き営まれる。墳丘墓には四隅突出型墳丘墓の可能性がある柴栗古墳群の墳丘墓、墳丘に貼石をもつ可能性のある三度舞墳丘墓、吉備系の大型壺が出土した大谷後口谷墳丘墓が所在する。

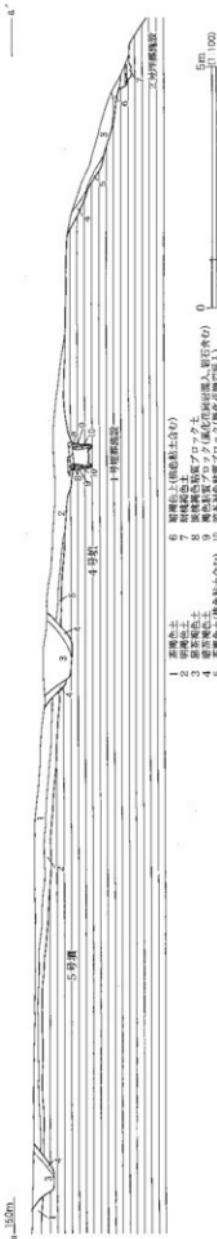
古墳時代になると、久米ヶ原丘陵に所在する服部遺跡・遠藤谷峯遺跡・中峯遺跡・白市遺跡・大沢前遺跡といった弥生時代後期から続く集落跡とともに、宮ノ下遺跡・櫛塚遺跡・大道谷遺跡・矢戸遺跡、上神地区では西山遺跡・猫山遺跡、和田寺谷地区では西前遺跡が出現する。前期古墳には、船載鏡三面と豊富な鉄製農具が出土した国分寺古墳（前方後方〔円〕墳・復元全長60m）、大谷大将塚古墳（前方後円墳・全長50m）、獣形石や琴柱形石製品の出土した上神大将塚古墳（円墳・直径30m）がある。その他、カスガイ状の周溝を持つ方墳群の猫山遺跡がある。5世紀代には、イザ原古墳群・沢ベリ古墳群があり、古墳時代後期には鞠ヶ家山の南側に上神古墳群が、向山丘陵には向山古墳群、四王寺山麓には大谷古墳群をはじめ多くの小円墳からなる群集墳が存在する。

奈良時代になると、久米ヶ原丘陵の東端に国指定史跡の伯耆国府が所在し、国府跡や法華寺廬遺跡、不入岡遺跡などの官衙跡が所在し、近接して伯耆国分寺が建立されるなど、古代伯耆国の政治・経済・文化の中心地であった。

寺院跡は、7世紀中頃に大御堂廬寺が建立され、7世紀後半には大原廬寺や斎尾廬寺（東伯町）が、8世紀には石塚廬寺が建立される。平安時代には四王寺山頂に四天王像を安置した四王寺が建立される。



第3図 高鼻遺跡遺構全体図



III 調査の概要

発掘調査は、農地造成される丘陵の尾根部分400mについて行なった。北方向へ舌状に延びる丘陵は、東西辺が著しく削平を受けており、旧状をとどめる部分は丘陵中央の尾根部分だけであった。調査区の基本層序は、表土（耕作土）・明褐色粘質土・淡桃褐色粘質土・疊粘質土となる。表土を含め果樹園造成時に削平が行なわれており、表土直下には淡桃褐色粘質土が露出しており、相当の削平があったことを物語っていた。しかし丘陵の先端付近、遺構検出部分では、明褐色粘質土面で古墳周溝を確認した。

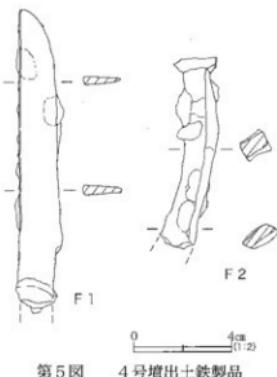
調査の結果、丘陵の先端部分で埴丘を失った円墳2基を確認した。主な遺構は、4号墳では中心主体部の箱式石棺墓1基・周溝内埋葬施設の石蓋土壙墓1基・古墳周溝を確認し、5号墳では古墳の周溝だけであった。

4号墳 丘陵先端部、標高13.5m付近に所在する。調査前には埴丘と思われる顯著な地形の高まりは確認できなかった。埴丘の規模は、丘陵尾根を横断するよう遺存する周溝から直径約8m、周溝を含めた直径は約10mを測る円墳であった。古墳の東西辺とも削平が著しく、中央部分の3分の2が残る。埴丘中央部で中心主体部である1号埋葬施設の箱式石棺墓1基を確認した。埴丘盛土はほとんど削られていたが、中心主体部を覆う明褐色土の盛土をわずかに確認した。

周溝 墓丘の南側で確認した。丘陵尾根部分で幅1～2m・深さ0.6～1mを測る。5号墳の周溝と重なるように作られる。土層断面の観察により5号墳より新しい。周溝断面形は幅の広いU字形状をなす。北側は丘陵の先端部にあたり、明確な周溝を確認することはできなかつたが、標高12.5m付近で2号埋葬施設の石蓋土壙墓を確認した。北側に明確な周溝が確認できない状況から、4号墳は斜面の高い側だけに周溝がめぐる可能性も考えられる。

1号埋葬施設 墓丘中央部に位置する中心主体部の箱式石棺墓である。わずかに残る明褐色土の墓丘盛土の下層で確認した。蓋石は、東側を長さ1.15mの大型の平石1枚で覆い、西側をやや小型の平石で上下2段に覆う。主軸はN 110° Eで丘陵尾根に直交する。石棺の規模は、内法で長さ1.63m、幅は東小口で0.42m、西小口で0.34mである。深さは石棺中央部で0.32mである。東小口に小型の平石3枚でV字形に組んだ枕を備え、西小口には平石1枚を棺床から約5cm上に敷いた枕を備える。このことから1号埋葬施設には追葬が行なわれており、頭位が東側の方が最初の埋葬で、頭位が西側の方が追葬と考えられる。石棺は、両小口に長方形に整形した平石1枚を立て、側石が小口石を挟み込むように組む。側石は両側ともそれぞれ2枚の平石を組み合わせてつくる。

第4図 4号・5号墳断面図



第5図 4号墳出土鉄製品

石棺掘り方は1段で、平面形は長方形で、規模は長さ2.0m、幅0.52m、深さ0.4mである。棺床は平坦で、東西の両小口に石を立てるやや深い溝を穿ち、側壁沿いにも石材を固定する溝を有する。

副葬品は、東小口の石枕の下から刀子F1(F1)と、蓋石の下から釘F2(F2)が出土した。

刀子(F1) 4号墳1号埋葬施設の副葬品。東側石枕の下部から出土した。全長12.5cm、身の長さは9.7cmで、茎部先端を欠損する。身先で幅1.3cm・厚さ0.4cm、身元で幅1.6cm・厚さ0.45cmである。茎部は残存部で長さ2.2cm・幅1.5cm・厚さ0.45cmである。平造りで片開。

釘(F2) 4号墳1号埋葬施設の石棺の蓋石の下から出土した。全長7.8cm。先端部を欠き、頭部が鉄鎗により剥離する。断面形は長方形をなし、上部で0.6×1.0cm、先端で0.4×1.2cmである。先端部は扁平な長方形となる。

2号埋葬施設 墳丘北側のわずかに旧状をとどめる丘陵斜面で確認した石蓋土壙墓である。丘陵斜面の高い側を約25cm掘り下げた平坦面に設置する。主軸はN120°Eで、墳丘辺にほぼ平行である。墓壙規模は、内法で長さ0.7m・幅0.35m・深さ0.1mを測り、非常に浅い土壤である。蓋石は大型の1枚石で、西端を小型の平石で覆う。副葬品は出土しなかった。

5号墳 丘陵先端部の標高14.3m付近に位置し、4号墳の南隣に所在する。調査前には墳丘と思われる顯著な地形の高まりは確認できなかったが、中央部付近で石棺石材が散乱していた。墳丘の規模は、丘陵尾根を横断するように遺存する周溝から直径約10m、周溝を含めた直径は約12mの円墳であった。古墳の東西辺とも削平が著しく、中央部分の三分の二が残る。墳丘は果樹園造成時の削平が著しく、表土下は淡桃褐色粘質土で墳丘盛土はなく中心主体部も確認できなかった。

周溝 舌状の丘陵尾根を横切るように墳丘の南北で確認した。北側は4号墳の周溝が重なる。周溝の規模は、南側で幅1~1.5m・深さ0.3~0.7m、北側で幅1.2~1.4m、深さ0.2~0.4mである。周溝断面形は幅の広いU字状をなす。南側の周溝内から土師器片・須恵器片が出土した。周溝内埋葬施設は確認できなかった。

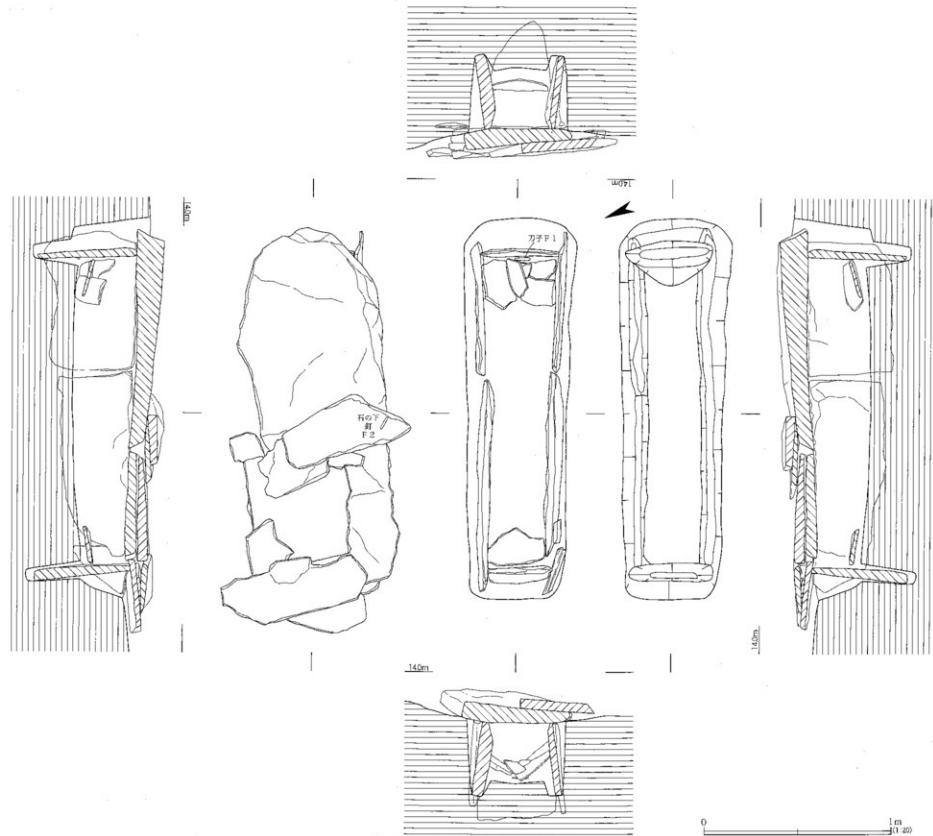
遺物 出土遺物は非常に少なく、周溝内から土師器(2~5)・須恵器(6)が数点出土した。器形のわかるものは口縁部を欠く小型丸底壺(1)だけである。

IV まとめ

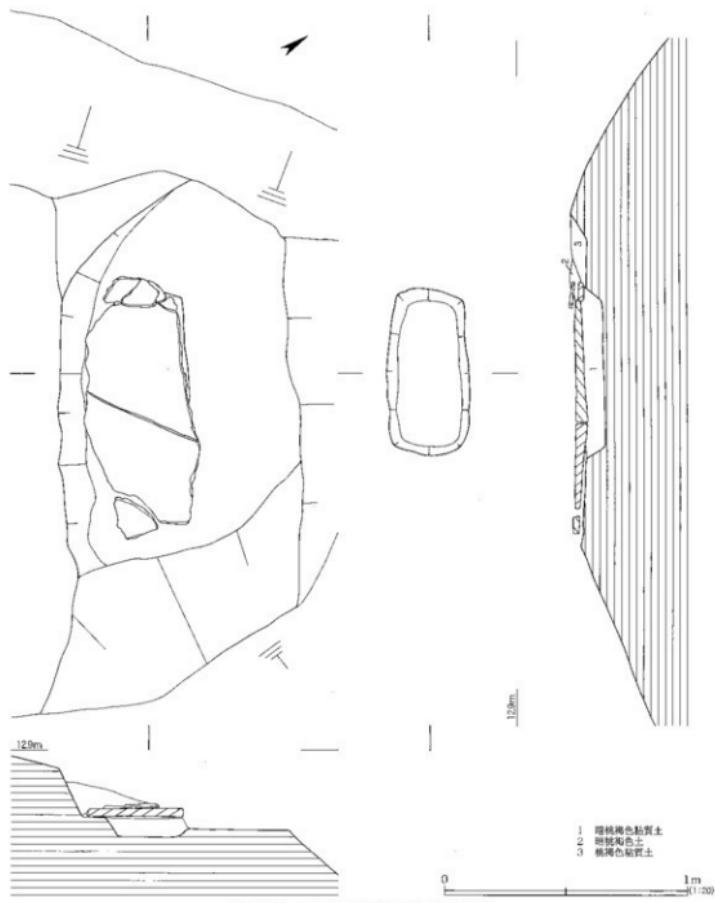
今回の調査は、個人の農地造成事業の事前調査として、倉吉市動字高鼻に所在する2基の古墳を調査した。いずれも直径10m前後の円墳で、4号墳は箱式石棺墓を埋葬主体とする古墳であった。古墳が位置する丘陵は、果樹園造成など後世の削平が著しく、丘陵そのものが旧状をとどめていなかった。確認した2基の円墳は、墳丘をはじめ大部分を失っており、遺存状態が非常に悪かった。

古墳について

当初、1基と考えていた古墳は、調査の結果、丘陵先端部に周溝を接して2基存在していた。4号墳は、丘陵先端に位置する直径約8mの円墳であった。中心主体部は箱式石棺墓で、石棺内に刀子1が副葬されていた。墳



第6図 4号墳1号埋葬施設構造図



第7図 4号墳2号埋葬施設遺構図

丘は削平され、周溝も、丘陵の尾根部分のみの遺存であった。5号墳は、4号墳よりも遺存状態が悪く、周溝によって古墳の存在を確認した。直径約10mの円墳であった。周溝の幅1m前後、深さ0.3~0.6m前後と小規模で、上面が削られている。

4号墳と5号墳は周溝が重なって存在しており、5号墳の周溝を4号墳の周溝が切っていると確認できた。この検出状況から、5号墳が古く4号墳が新しいと判断できる。古墳の時期は、出土遺物が非常に少なく判断に苦慮するが、4号墳の主体部が箱式石棺墓であるところから、5世紀代の円墳と推測する。

なお、今回調査した高鼻遺跡周辺には、昭和57年度に調査した前方後円墳の高鼻2号墳のほかに、確認できた古墳が3基存在しており、今回調査した2基の古墳を含めると計7基からなる古墳群を構成する。

報告書抄録

告 名	高瀬遺跡発掘調査報告書						
調 書 名	――						
告 次	――						
シ リ 一 ズ 名	愈吉市文化財調査報告書						
シ リ 一 ズ 号	第117集						
編 著 者 名	森下曾哉						
編 集 者 編	愈吉市教育委員会						
所 在 地	〒682-8611 鳥取県愈吉市栗町722番地 TEL:0868-22-4439						
発 行 年 月 日	西暦2002年3月20日						
所取遺跡名	所在地	コ ー ド	北 対	東 綫	調査期間	調査面積	調査原因
西町村：遺跡記号		31203:4 BST	36°27'15"	133°46'15"	2001/07~2001/13	400m ²	個人の興味造成
高瀬遺跡	谷吉市高瀬字高瀬	主な時代：主な遺物	主な遺物	特記事項			
高瀬遺跡	標別：古墳：古墳	主な時代：主な遺物	主な遺物	特記事項			
				墳丘が削平された円墳の周溝。			



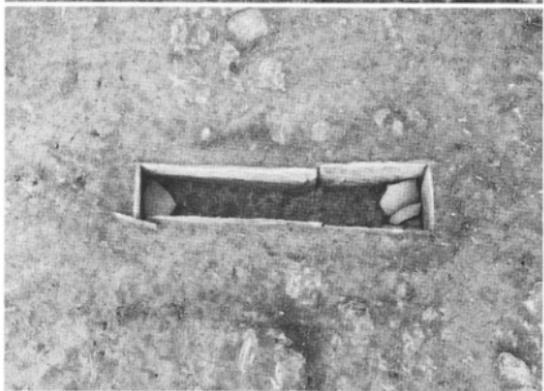
調査後遠景（北東から）

全景（南から）

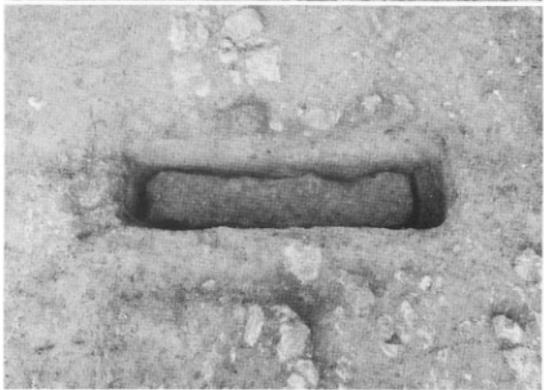
图版2



4号墳1号理葬施設
蓋石（南から）



石棺（南から）



掘り方（南から）

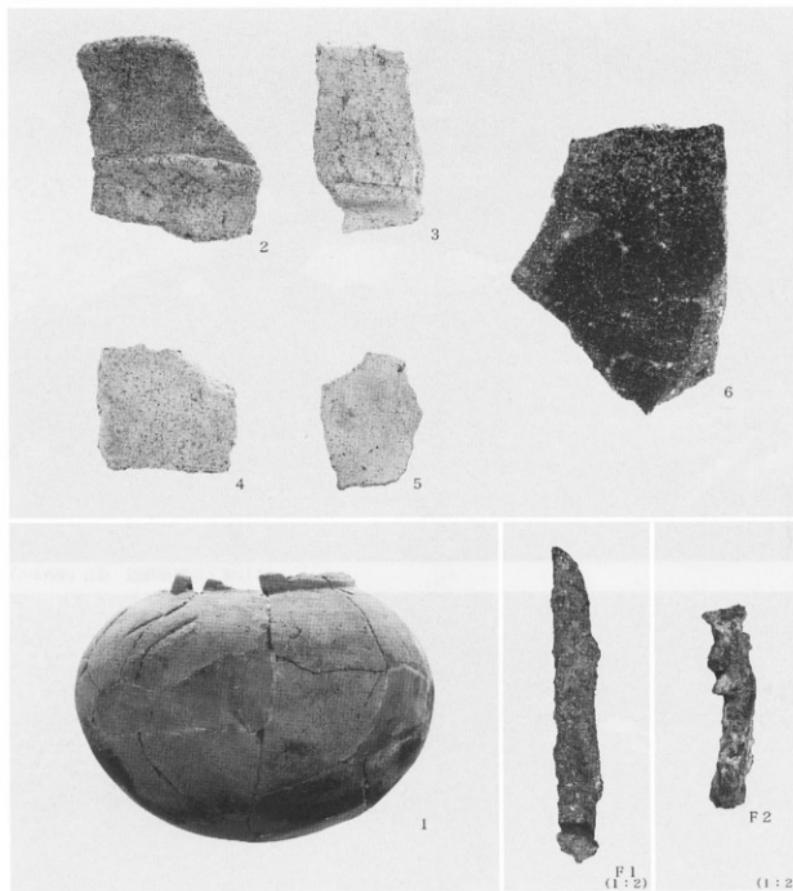


4号墳2号埋葬施設 蓋石(南西から)



掘り方(南西から)

图版4



4号·5号墳出土遺物

210.2
kur
(117)
図書館

高鼻遺跡発掘調査報告書

平成14年3月20日 印刷

平成14年3月20日 発行

編集 倉吉市教育委員会

印刷 製本 山本印刷株式会社